

P2-010

0～3歳児の子育てにおける悩みと地域子育て支援—三世代同居家族と核家族の比較—

瀬戸 淳子¹、秦野 悦子²

¹帝京平成大学

²白百合女子大学

【目的】

筆者らは、一連の研究で、三世代同居家族と核家族という居住形態による子育てネットワークのあり方の違いを比較検討してきた(秦野・瀬戸、2014、2017;瀬戸・秦野、2017a、b)。これらの研究からは、祖母や父親の育児協力の程度などが居住形態によって異なることが示された。本研究では、子育てにおける悩みや相談先、地域の子育て支援の参加に対する気持ちに焦点をあて比較検討する。

【方法】

調査参加者：0～3歳児(Range:9か月～3歳9か月)を第一子にもつ母親で、1.実親と三世代同居群103名、2.夫親と三世代同居群103名、3.核家族群164名、計370名。調査期間：2017年1月。手続き：子育て環境や育児感情などに関する25の質問調査項目について、マクロミルに委託してネット調査を実施した(H28年度公益財団法人前川財団 家庭・地域社会教育研究の助成を受けた)。分析対象：Q17:子どものしつけや発達で気になること、Q18:しつけや発達の相談先、Q16:地域の子育て支援(子育て広場、育児サークルなど)への参加に対する気持ち、についての4件法での回答を分析の対象とした。

【結果と考察】

1) 子どものしつけや発達で気になること：設問13項目を固有値1、因子負荷量.40を基準に因子分析し(主因子法プロマックス回転)、0～3歳児を第一子にもつ母親のしつけや発達の悩みを構成する3つの因子が抽出された。第1因子は発育や発達など4項目からなる「発達」因子で、第2因子は行動特性や関係性に関わる4項目からなる「行動の適応」因子、第3因子は食事、排泄など3項目からなる「生活」因子であった。気になる内容としては、「生活」>「行動の適応」>「発達」という特徴がみられ、居住別では、夫親同居群は他群より有意に「生活」面が気になることが示された。2) しつけや発達の相談先：9項目の相談先として、夫：核家族群>実親同居群、実親：実親同居群>夫親同居群・核家族群、夫親：夫親同居群>実親同居群・核家族、という特徴がみられた。3) 地域子育て支援の参加に対する気持ち：設問8項目を固有値1、因子負荷量.04を基準に因子分析し(主因子法プロマックス回転)、2つの因子が抽出された。第1因子は5項目からなる「親の相互交流期待」で、第2因子は3項目からなる「参加不安」であった。居住別では、「親の相互交流期待」は、夫親同居群・核家族群は実親同居群より有意に高いことが示された。